

このたび寺田寅彦記念館友の会にて講演をさせていただきました徳島大学の依岡です。私は作家ギュンター・グラスの研究をしている文学者ですが、なぜ私が寺田寅彦のお話をするようになったのでしょうか。実は私は寺田寅彦とたくさんの共通点があります。ふるさとが高知であるばかりでなく、ドイツ文学専門なので、ドイツ留学をした寅彦とはドイツつながりでもあるのです。昨年の夏、出張でベルリンにいったとき、寅彦の下宿していた通りも見てきました（図1）。

大学の授業でも寅彦の作品はよく取り上げています。「名著講読」という授業でテキストにしているし、学生同士で気に入った箇所をフェイスブックで披露しあうという「ソーシャル・リーディング」も試みました。また、寅彦について講演（平成25年1月27日、徳島県立文学書道館にて）したこともあります。地元の『徳島新聞』では「読書のススメ」という本を紹介する連載をやり、それをまとめて単行本として出しましたが（図2）、その中で寅彦は最多3回、取り上げました。こんなつながりゆえに、ここで話しさせていただいたのです。

「寺田寅彦の文学的世界」と題しました。東北大震災後、寅彦の地震・天災にまつわる作品の再出版や関連本の刊行が相次いでいます。また茶話会という異質な時間を隙間に挟んで仕事を活性化させる仕事術の点などで再評価されてもいる。アメリカ風の「コーヒープレイク」を地震研究所や理化学研究所のスケジュールに組み込んだもので、現代の企業でも取り入れられています。しかし寅彦はもっと文学の面でも注目されるべきだと、私は思うのです。

そもそも寅彦にとっては科学と文学は別のものではありません。細分化するのが近代科学でしたが、その一方で、科学が互いの連関を見失い全体を見渡す目をなくして暴走することも起こっています。そういうなかにあっては、文学的側面も含む寅彦の総合的視点は改めて再評価されるべきではないでしょうか。

寅彦と文学といえば、やはり俳句です。熊本の第五高等学校で夏目漱石に教えを受けましたが、英語というより俳句の手ほどきを受けたようです。その後もずっと俳句を続けました。『柿の種』は俳誌『渋柿』に連載されたエッセイですが、短文で無駄がなく、余計なものをこそぎ落とした象徴的な表現になっていて、散文による「俳句」のように思えてくる。日々の生活を観察した成果となっており、日常の中の不思議を、ときに科学的にときに思想的に取り上げている。しかも、洗練された抒情性もあるのです。

子規の「写生」の実践ともいえますが、ただありのままを書いているのでもない。むしろ「虚実皮膜の間」というように、一滴の虚を混ぜるところにそのエッセイの真実がある。

名作として知られ、漱石にも誉められた「団栗」をとりあげてみましょう。亡き妻・夏子への哀惜の念が表現されているが、一方でこれは私生活をただ書いた随筆でもなかったのです。『ホトトギス』誌に掲載されたときには、実際「小説」と称していた。たしかに寅

彦の日記には夏子と近くの小石川植物園に行ったと記されています。この作品が作者の実体験を元に描いてはいるのは間違いありません。しかし、ありのままではなかったのです。娘・貞子は父と植物園に行った記憶がないと後に証言しています。だが、娘と訪れたというフィクションがこの作品の真実味を増したことも間違いのないでしょう。

昨年冬の東京に行ったとき、この作品の舞台となった小石川植物園に寄ってきました。「団栗」の木のある係の人に尋ねて、こんなに木を観察したこともなかったくらい熱心に探しました。そして、なんとかその場所も特定できました(図3)。園を後にする頃には、おそらく植物学者だった係の人ともすっかり打ち解けていました。こうした「出会い」も分野を超えた活躍をした寅彦のおかげだったのかもしれない。

このように寅彦文学は科学・哲学思想を日本語にのせる文体を編み出し、科学のテーマや哲学的思索を一般の人にも読ませるものになっています。また一方で、抒情性を象徴的に表現した点は、近代日本の随筆文学の先駆といってもよいでしょう。寅彦の文学は科学の業績に勝るとも劣らぬ魅力があり、かつその科学の活動を補うものであるがゆえに、現代において再評価されるべきものなのです。



図1



図2



図3